

オランダ通詞菊谷米蔵・幡崎鼎

―シーボルト事件による波乱の人生―（その一）

イサベル・田中・ファンダーレン

はじめに

今回取り上げるオランダ通詞は菊谷米蔵（一八〇七―一八四二）である。彼は一八二六年に父（あるいは養父）であった内通詞小頭見習菊谷藤太とともに「甲比丹部屋附^{カピタン}」として江戸参府に随行した。一八二八年のシーボルト事件に連座し、「町預」となっていたが、一八三〇年、無罪判決が下る直前に脱走し、「永尋」の者となり、長崎から離れた。

シーボルトが一八二三年に来日する前に、米蔵は内通詞小頭見習荒木豊吉とともに商館長プロムホフが手掛けていた蘭和对訳辞典編纂作業にも参加していたため、低い通詞の階級とはいえ、オランダ語に特に精通していたと思われる、シーボルトの直弟子の一人にもなっていた。

逃走中に幡崎鼎と名を改め、先ず京都で自分の知識を深め、江戸で塾を開き、蘭学者として活躍するようになった。一八三三年病死した水戸藩の西学都講・青地林宗に代わって、水戸藩に招かれ、『海上砲術全書』といった鑄砲造艦の翻訳事業に携わっていた。尚齒会のメンバーであった渡辺華山、高野長英、小関三英などの蘭学研究を助け、葦山代官江川太郎左衛門にも軍事技術情報を提供したりして、当時の江戸後期の蘭学界には欠かせない人物であった。

しかし、一八三七年に藩命により和蘭の造艦書購入のため再び長

崎を訪れた際、以前の事件が露顕し、長崎奉行所に捕縛され、江戸に護送された。一八三八年に「追放」となり、伊勢菰野藩預かりとなった。それでもシーボルトの医学の教えや地質学的知識を広めたが、四年後に満三五歳の若さで病死した。現在、三重県菰野町の如来寺に葬られている。

彼の短い生涯は、シーボルトと出会う前の「阿蘭陀人部屋附」としての活躍期、シーボルト事件のきっかけとなった一八二六年の江戸参府随行以降のシーボルトと関わった時期、また「永尋」として江戸などで蘭学者としての活動期、菰野藩での預かり期間という四期に分けることができる。

米蔵に関する先行研究の多くは彼の生涯の一部に焦点を絞って検討しているため、その全体像については詳しく検討する余地がある。彼はシーボルトの直弟子の一人として、シーボルトの教えを広く伝授していたが、結局はシーボルトとの出会いによって運命が暗転せざるを得なかった。したがって、オランダ語史料などから得られる新たな情報を加え、彼の生涯全体について考察をおこない、二回に分けて、まとめることにしたい。

一、オランダ内通詞小頭の菊谷家

オランダ通詞は大きく「本通詞」と格が低い「内通詞」に分かれ、内通詞の代表格となる役職は「内通詞小頭」があった。内通詞小頭の子は親を継ぐ前にオランダ人の家で見習いのため使用人として働くことが多かった³。毎日のオランダ人との接触により、本通詞よりオランダ語に精通していた「阿蘭陀人部屋附」の者も少なくなく、江戸参府についても仕来りを身に付けるため内通詞小頭の子が、親

に付き添ったこともしばしばあった。一八二六年の江戸参府の際の菊谷米蔵とその父藤太の場合もそうであった。江戸滞在中、内々に商館長や商館医を訪れる高官や藩主は、本通詞よりこれらオランダ人の使用人として位置づけられている内通詞を通訳として利用したがっていたようである。それは、使用人のほうが比較的当局に厳しくは監視されなかったからでもあったようである。内通詞小頭は本通詞不足の時には一種の予備軍の役割をも果たし、中には本通詞の役職にわたる稽古通詞に昇進することもあった。

菊谷家の内通詞小頭としての勤務歴は藤太の代からのようで、現存する分限帳類に初めて菊谷という苗字が出てくるのは一八三〇年の「長崎諸役人帳」に掲載されている内通詞小頭見習の菊谷藤太と見習同格の無給の藤平（＝米蔵）である。⁵しかし、すでに一八二六年の江戸参府の折に藤太が「内通詞小頭見習」として、藤平は「カヒタン部屋附」、「阿蘭陀人部屋附」として参加していたことが判明している。⁶菊谷家はそれ以前から代々一般の内通詞の家だったとも考えられる。

その手がかりが、一八一三年～一八一八年に長崎へ遊学した京都の医師新宮凉庭（一七八七～一八五四）による J. de Gorter 著「窮理外科則」第七篇という訳書の「附言」にある。⁷そこに記されている「謹識者」は「長崎 今籠町 菊谷芳満藤太」のことを指し、「家世給事阿蘭陀館」という記述より菊谷家の者は代々、出島商館に入りしていたことが分かる。同「附言」によれば、芳満が出島で蘭方の精確を知り得たが、その知識を補うために新宮から朝夜に講義を受けたとも記されているので、藤太（芳満）は、蘭方医学に相当の知識があったことも窺える。⁸凉庭の長崎滞在中、藤太はすでに商館長の部屋附を勤めていたと思われる。⁹

さらに、シーボルトの門人にもなった米沢藩医伊東昇迪（一八〇四～一八八八）が一八二六年～一八二九年に長崎に滞在した時、一八二六年六月に到着して以来菊谷家に宿泊し、藤太の紹介によって八月五日に吉雄権之助の塾に入門することになった。昇迪は藤太と米蔵（＝藤平）親子の案内でよく町に出かけ、米蔵の兄（あるいは義理の兄）である今籠町の組頭岡村真兵衛とも付き合いがあったことは昇迪の長崎滞在日記に詳しい。¹⁰

藤太はそれ以前に長年商館長ドゥッフ（H. Doe）の使用人を勤めていたことが、一八一八年頃のドゥッフの後継者宛ての覚書から窺える。¹¹その中で内通詞（*particuliere tolken*）について述べているが、さらに次のように記されている。

「商館長に三人の上級使用人（*opperdienaar*）が仕えている。彼らは内通詞の子供で、親の死亡後に後を継ぐ。（中略）その他に五人の下級使用人（*onderdienaar*）もいた。江戸参府の折にこの中の一人は商館医に、もう一人は書記に就く。（中略）下級使用人の内の Toda（藤太）と Gihatsi（儀八）は特に信用できる者である。前者藤太は一から十までよく知っており、とても素直で誠実な人で、たまには酒を飲むが、大酒飲みではない。私的な取引においては彼はとても役に立つ。（中略）秘密のことも安心して彼に話しても良い。彼は下級使用人のうちで最も年長であるので、何年間も五〇テールの手当てを余計に彼に出していた。」

藤太は一八三〇年の商館日記には「*opperdienaar*」として出ているので、それ以前に下級使用人から上級使用人に昇進したことになる。¹²

米蔵は、オランダ商館長デ・ステュルレル (J. W. de Sturler) (一七七四～一八五五) の日記の一八二六年二月一〇日の項に初めて「日本人使用人の一人 Joneso」(米蔵) として登場するが、それ以前にも商館長コック＝ブロムホフ (J. Cock Blomhoff) (一七七九～一八五三) の使用人(「カピタン部屋附」) であったとも思われる(次章参照)。米蔵は昇進の長崎滞在日記「寄陽日簿」によれば、一八二六年一月一三日に「内通詞見習格」、つまり「内通詞小頭見習格」に任命された。¹³

その後起こったシーボルト事件で藤太と米蔵は二人とも処罰を受け、一八三〇年以降の分限帳類には菊谷の名字は見られなくなった。菊谷家の内通詞小頭の株が取り上げられていたと思われる。¹⁴しかし、安政期になると、菊谷藤太という名が分限帳類の内通詞小頭の欄に再び登場する。名字から考えれば、文化・文政年代に活躍した菊谷家の縁者だったに違いないだろう。この藤太は安政二(一八五五)年に「内通詞小頭見習」から新規に「内通詞小頭」に昇進したことが「萬記帳」同年五月二五日の項から分かる。¹⁵同じ内容の記述は慶応元(一八六五)年の「明細分限帳」にも出てくるが、この時期に内通詞小頭の欄には彼の名しか見られない。¹⁶上記の一八六五年の史料は彼の年齢を四七歳としているので、生まれは一八一九年頃となる。慶応四(一八六八)年の分限帳類では彼の肩書は「中等通弁役」に代わっていた。¹⁷

二、ブロムホフ「蘭和对訳辞典」と菊谷米蔵の関わり

ライデン大学図書館蔵の貴重書の中に商館長ブロムホフが一八二三年末に日本から持ち帰った蘭和对訳辞典 *Hollandsch en*

Japansch Woordenboek が保管されている(図1、2)。¹⁸二人の日本人の手によって和紙に書かれ、四〇冊からなる未完の辞典である。欠けている見出しの文字は G、O、S、T、U、W、X、Y、Z であるが、それ以外だけでも三万語に及ぶ。¹⁹ライデン大学所蔵の日本書籍目録によれば、この辞典は「二八二四年頃」(原文ママ)に「ブロムホフの世話 (les soins) によって通詞たちアラキ・トヨキチとヨネソによってウエイラント (P. Weiland) 大辞典を参考にして編纂された」とある。²⁰



図2. 文字Aのタイトル頁
(ライデン大学所蔵)



図1. ブロムホフの
「蘭和辞典」



図4. 米蔵と豊吉が分担して記入した例



図3. 文字Aに貼付された豊吉による注意書き

筆跡を見ても、内通詞兼部屋附荒木豊吉と菊谷米蔵のものであり、一頁にはオランダ語の見出し語とローマ字綴りの日本語が並び、筆跡は基本的に同一である。豊吉が書いた部分が圧倒的に多く、AからHの2、I、Mの1、3、Nの1、2、Pの1、Q、Rの1、Vの1、4、7を、米蔵はHの3、J、Kの1、Lの1、3、Mの2、Vの2、6、8を担当したが、Kの2、3、Lの2、3、Pの2、Rの2、Vの2、3、5は二人が分担したものである(図4)。

時には米蔵の担当分の和訳に豊吉の筆跡が見られる(図5)²²。最初から編纂の中心は豊吉であつたようで、米

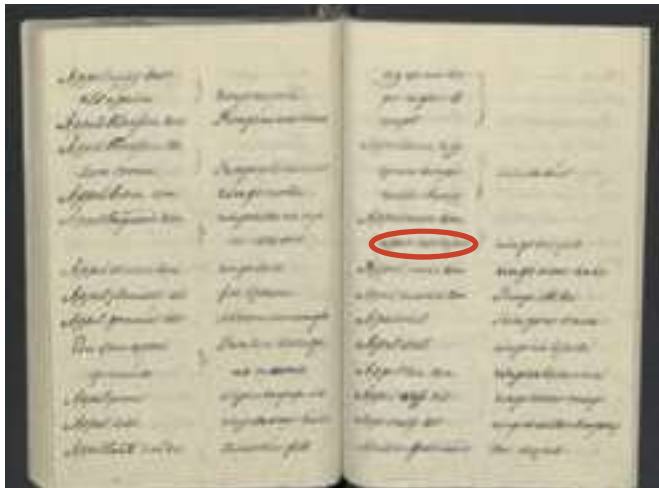


図6. 豊吉が「apper verkoper」と写し間違えた例



図5. 米蔵による見出し語に豊吉が訳を追加した例

蔵は後の段階で関わってきたようである。ブルムホフが離日した後にも豊吉はいくつかの文字の部分を送ったようである。オランダ語の見出し語にはまれにオランダ人なら犯すはずがない発音表記の違いが見られる(図6)²³。和訳では豊吉が「人」を「fio」として表していたことに対して(図6)、米蔵は初めは「vito」と書いていたが(図7)、後に豊吉の「f」綴りに合わせたようである(図8)²⁴。

所々にオランダ語の見出し語の前に「D」が見られるが、それはドゥフが日本の状況に合わせて自分で付け加えた単語であると考えられる²⁵。「D. Collegie der tolken tsooezi



図 8. 米蔵による「fito」の綴りの例

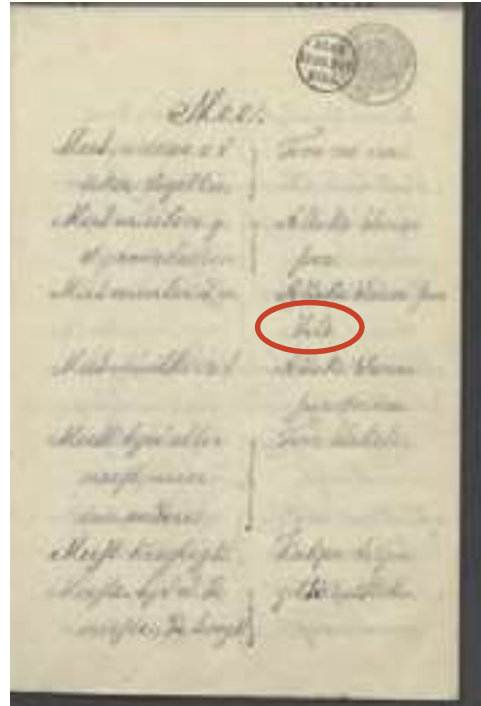


図 7. 米蔵による「vito」の綴りの例

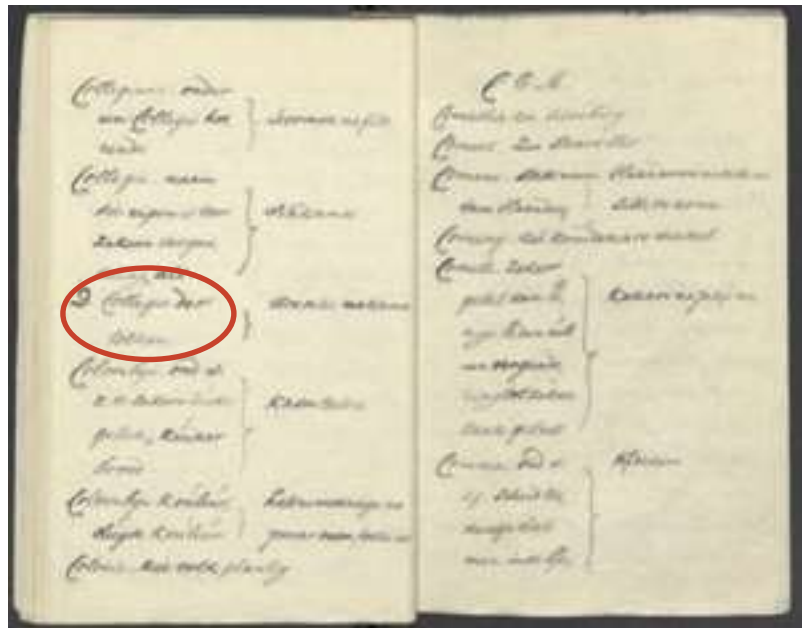


図 9. 「Collegie der tolken」という例文の前に Doeff の D を記した例

トヨキチとヨネゾーとのひそかな信頼できる助けによって、ウエイランドに従って校訂した辞書の部分を写してもらって手に入れた。書物や珍しい事物をたくさん集め、他の国々と民族との調査にたいへん成績を挙げたとみんなから認められているブロンホフが帰国して、それまでに「滞日中に」出来上がったいた本の部分と、後に「離日してバタビアへ移って後に」有能なアラキ・トヨキチからバタビアに少しずつ送ってもらった部分と

に書けるアラキ・「一八一八年ヘンリック「ヘンリクス」・ズーフの跡をついだコック・ブロンホフが通訳の努力に気持ちが悪かったので、オランダ語が上手でローマ字がきれいに書けるアラキ・

nakama」がそのよい例である（図 9）。この辞典の存在を初めて紹介したのはシーボルトである。一八四一年発行の『日本文庫案内』にラテン語で次のように記している。

を、ハーグの王立博物館に収めた〔現在ライデン大学に移管〕。いかにも残念なのは、この立派な原稿が今までほとんど知られていず、無視されたままなことである。

このブロンホフによる写本は、非常にきれいなローマ字で日本の和紙に書かれ、いわゆる小二つ折判の三九冊〔四〇冊現存〕に製本されている。日本語がオランダ語の正字法によって書いている。しかしそれには、G・O・S・T・W・X・Y・Zの各字「の部」が欠けている。ブロンホフが初めてこの辞書の写本をヨーロッパに送ったのは、彼の名誉になる。²⁶」

この解説によれば、ブロンホフは一八一八年の通詞たちの努力、つまり『日本文庫案内』に出ているドゥフ商館長が一八一二年から通詞たちの協力で編集した「ゾーフ・ハルマ」という蘭和辞典に注目し、豊吉と米蔵の助けを得て、ウェイラント (Weiland) の「オランダ語辞典」を参照して訂正された辞書の一部を（おそらく豊吉と米蔵によって）写してもらい、手に入れた。ブロンホフは離日後、在日中に出来上がった分と、離日した後に豊吉からバタヴィア経由で少しずつ送られた部分と合わせてハーグ市の王立珍品陳列室 (Koninklijk Kabinet der Zeldzaamheden) に収めた。²⁸

「ゾーフ・ハルマ」の成立過程に関しては、シーボルトは『日本文庫案内』で次のように語っている。ドゥフは長年にわたる日本滞在中に日本語をある程度マスターし、数人の日本人の助けを得て、²⁹「ハルマ (Halma) の蘭仏・仏蘭辞典を底本にして、それを一語一語順番に翻訳した。通詞たちに単語や例文の意味をオランダ語でできるだけ詳しく説明してから、通詞たちがそれを俗語（つまり長崎弁）で、書き記した。ドゥフはその和訳を発音通りにローマ字で

自分の原稿に書き留めた。これがドゥフ・ハルマの初稿・下書き (Klad) にあたり、離日の際に通詞目付茂伝之進の息子土岐次郎に送別の記念としてその下書きを贈った。シーボルトは触れていないが、その後一八一六年八月長崎到着の幕命に従って、³¹ドゥフが翌年末に帰国する事になるが、その直前まで、一人のオランダ通詞とともに初稿を増訂した。³²通詞たちが「大奉書紙」に清書したものは通詞会所預けとなった。³³もう一部はドゥフ自身によって書き写されたが、帰国の際に船が難破し、他の荷物とともに海の底に沈んでしまった。ドゥフが帰った後にもその改訂作業が、おそらくブロンホフの監修の下でしばらく継続されたようである。³⁴一八一九年の前半、原稿は第二稿として完成した。その後再び新たな幕命によって、オランダ人の助けなしで何人かの通詞たちが、³⁵辞典を幕府に献上するためにさらにウェイラントの辞典を参照しながら上記の第二稿をさらに改訂した。シーボルトが日本を去った一八二九年一二月の時点ですでにその作業はG、O、Vの部分以外は完成していたという。この第三稿はようやく天保四年二月（一八三四年一月）に出来上がり、桂川甫周が校閲し、『和蘭字彙』のタイトルで一八五五（一八五八年）に出版された。³⁶しかし、それまでに写本が世上に流布していた。

シーボルトは、第三稿に向けての改訂作業の際に通詞たちがウェイラントの辞典を参照したと述べるが、実際は定かではなく、また「ゾーフ・ハルマ」、つまり「長崎・ハルマ」と稲村三伯編「江戸・ハルマ」を混同もしていた。しかし、シーボルトはブロンホフが「ウェイラントに従って校訂した辞書の部分」を写してもらったと述べていることから、ブロンホフの辞典の大部分は第三稿に向けての原稿に基づいていたと言えるのではないか。さらに、豊吉はおそらく通

詞会所に保管された第二稿をも部分的に書き写したことが、豊吉がブロムホフへ宛てた一八二六年二月一九日の書簡から推定できる。³⁷

「(中略) 貴様が文字Dの第二部を見つけないと聞きましたが、「必要であれば」それをまた写して送ります。できれば、さらに五つの文字「(の分)」も送りたいのですが、將軍のための分はまだ出来上がっていませんので (“*dog dewijl het nog niet klaar voor den kijzen is*”)、「その分を」写すことができません。ただ、今は「丁度」文字Oを写しているところです」。

つまり、將軍に献呈する第三稿に向けての改訂作業は一八二九年末の時点では文字G、O、Vを除いて完成していたため、豊吉が一八二六年にブロムホフのため文字Oを写すには第二稿(あるいはドウフの初稿)を利用するしかなかった。しかし、結局は文字Oはブロムホフには届かなかった。

「ゾーフ・ハルマ」の成立過程についてはいくつかの先行研究があるが、古賀十二郎を参照した松田清氏の研究が最も新規性に富む。³⁸さらに松田氏は一八八四年に高知県立追手前高等学校の書庫でドウフ自身が書いたと思われる辞典の初稿の一部を発見して以来、現存する様々な原稿を詳細に検討した。³⁹その結果、ブロムホフの辞典の文字Aだけはドウフが自ら書いた初稿の写しであることが判明した。しかし、残念ながら第二稿の存在はまだ確認されていないので、第二稿が初稿と比べてどの程度まで改訂されたのかは不明である。⁴⁰また、豊吉と米蔵は初稿、第二稿、第三稿をただ写しただけな

のか、それともブロムホフと共に、あるいは単独である程度新しい訳を付けたのかも今の段階では決定しがたい。

ドウフの初稿のローマ字和訳には、数多くの長崎独特の言い回し・発音が見られるので、この初稿は長崎方言の研究の貴重な資料としてすでに利用されているが、⁴¹ブロムホフの辞典ではそのほとんどの個所が(ゾーフ・ハルマの第三稿と同様に)「標準語」となっている。⁴²

ドウフの辞典の主な目的が、通詞たちのオランダ語能力の向上のためであるのに対して、ブロムホフのそれは辞典をオランダでの日本語学習に役立てるためであった。しかし、実際に使われた形跡はほとんどない。

シーボルト来日前の米蔵の活動については、このブロムホフの辞典との関わり以外には全く手掛かりがないが、豊吉に関してはいくつかの資料が残っている。⁴³荒木家がすでに一六九七年から内通詞小頭を勤めていたことは分限帳類から窺える。⁴⁴豊吉の(養?)父八之進は天明年間からの分限帳類に内通詞小頭として登場し、一八二六年五月一三日に臨時(*temporeel*)稽古通詞に昇進した。⁴⁵豊吉自身は一八一〇年四月二二日に「*oppendienaar*」(上級使用人)に任命され、⁴⁶一八三〇年の分限帳で初めて稽古通詞見習として出てくる。

豊吉には蜂之進という別名もあった。⁴⁸豊吉の息子熊八(≡蜂之進／八之進)(一八一四?)は荒木家の第一一代に当たり、一八三二年三月に稽古通詞見習になり、一八五九年には大通詞過人にまで昇進した。その息子(養子)は第二二代となった卯十郎(一八三七?)であった。⁴⁹また「*Geleket Door Toiokiti te Nangasaky in Ao 1810*」(あるいは1811)「一八一〇年に長崎においてトヨキチによって描かれた」と記されたドウフの肖像画も現存していたことから、⁵⁰

豊吉が唐絵目利・長崎派画家荒木元融や荒木如元と同じ家系の者であった可能性も考えられる。⁵¹ 豊吉は後には私的取引を手伝うほどシーボルトとも親しくなっていた。⁵² 一八二六年の江戸参府の際に「稽古通詞見習（本古川町）」として付き添ったため、不本意ながらシーボルト事件に連座することとなり、「五〇日押し込め」の処分となった。⁵³

三、一八二六年の江戸参府とシーボルト事件をめぐる菊谷米蔵 （藤市、藤平）

菊谷藤太と米蔵親子は商館長のオランダ人部屋附として一八二六年の江戸参府に随行した。藤太（内通詞小頭見習、今籠町）は荒木豊吉と同様に、道中や江戸で見物人や病人が訪れた際に十分取り締まりせずに、「禁の品」の受領を見逃したため「五〇日押し込め」の処分を受けた。⁵⁴ 米蔵は本来は他の部屋附の者と同様に軽い処分で済むはずであったが、一八二八年一〇月に姿を眩ませた。多額の借金があったためではないかと思われていた。⁵⁵ 米蔵は翌年三月三〇日（二月二六日）に自首し、翌日に長崎奉行所で取り調べを受けた。シーボルトが出島を出発したその一八二九年二月三〇日（文政一二年二月五日）前には米蔵を含むシーボルトの生徒たち（*three leerlingen*）が送別会を計画していた。⁵⁶ 一八三〇年に入ってから「藤市事藤平」（＝米蔵）が吟味のため町預けとなっていたが、閏三月二五日（五月一七日）「過料錢三貫匁」という判決が出る前の閏三月九日（五月一日）に「夜中欠落」し、⁵⁷ 一八三〇年九月一八日（一一月三日）には「永尋」となった。兄であった今籠町組頭岡村真兵衛も弟藤平の「吟味筋有町預申付置内逃去」の責任が問われ、「急度

叱り」となった。⁵⁸

藤平のさらなる罪の詳しい内容は、本人藤平ならびに参府に同行していた上級検使役水野平兵衛と大通詞末永甚左衛門の取り調べとその判決文から知ることができる。⁵⁹ それによれば、江戸滞在中に水野は末永から、商館長が葵紋の羽織を所持しているとの密告を受け、蘭人部屋付きの藤平を呼んで、それを探し出すよう命じた。しかし、長崎に帰るまでその時間がなく、着崎後に藤平がその羽織を密かに取り出して、出島へ出役した水野に渡した。水野はそれを結局「竈の下に差し入れ焼捨」てた。さらに、シーボルトも「葵紋付き黒緇子の単物」を秘蔵していることが分かったので、それもまた同じように処分し、末永と藤平はそのことについて誰にも口外しないようにさせた。葵紋付き羽織などは、眼科専門の奥医師土生玄碩親子が江戸の長崎屋で治療法などの「伝話」に対する謝礼として贈ったものであった。要するに、藤平のさらなる罪とは上司の末永甚左衛門と水野平兵衛に言われた通りにした実行役に過ぎないものであった。一八三一年二月にデ・フィレネウフェが出島の様子をシーボルトに報告する書簡で米蔵（Tonzo）にも触れている。原文を訳すと次のようである。⁶⁰

「ここ「出島」のオランダ人が最も不思議に思っていることは、姿を眩ましてから、自発的に日本当局に出頭し、監禁された使用人米蔵がこの春に自由になる判決が言い渡される二日「原文ママ」前に、再び旅に出たことである。我々二人（^{ママ}？）だけは彼の行き先を推測できるだろう。私が内々に聞いたところでは、二人の下級検使が彼を探しに出たが、内密に彼がいはいはずの場所しか探さないようにと命令されたそうである。もしそ

の旅が成功しないとしても、逃走の原因が恐怖であるという言い訳は常に行える。どうか、この立派な青年を助け、あなたのところにロシア経由で逃がすように手配してください。神のご加護がありますように。この最後の「逃走の」知らせを聞いたメイランの「ぎょっとした」顔が私の最大な楽しみであった。彼「＝メイラン」は米蔵がメイランとフィッセル [G.F. van Overmeer Fischer] のためにあまりにも働かなければならなかったもので、その恐怖で逃げたと想像していたからである。」

この文章からでもデ・フィレネウフェとシーボルトの米蔵に対する親しみの感情が十分伝わってくるのである。

〔謝辞〕

資料提供や教示をくださった石田千尋、織田毅、杳沢宣賢、松井洋子、藤本健太郎、W.J. Boot の先生方にお礼を申し上げます。

(東京大学史料編纂所共同研究員)

注

¹ 生年に関しては古賀十二郎『西洋傳來史』(形成社、一九七二年(復刊)二五四頁)によるが、その出典は明記されておらず定かではない。

² 主な先行研究は、呉秀三『シーボルト先生 其生涯及功績』(吐鳳堂、一九二六年[第二版])(復刻…平凡社一九六七～一九六八年、三冊、乙篇を含まない)、同「南川維遷都幡崎鼎(伊勢孤野之二学者)」(『医文学』第一卷四号、一九二五年)、二七七～二八六頁、伊東多三郎「蘭学者幡崎鼎」(『伝記』四卷一号、一九三七年)、三〇～四〇頁(『近世史の研究』第二冊「国学と洋学」、吉川弘文館、一九八二年、二八二～二九九頁にも所収)、孤野町史編纂委員編『孤野町史』(名著出版、一九四一年)(復刻版二九七四年)、佐藤昌介『洋学史研究序説―洋学と封建権力―』(岩波書店、一九六四年)、鈴木暎一『水戸藩字問・教育史の研究』(吉川弘文館、一九八七年)、一六六～二一〇頁、織田毅「オランダ通詞菊谷藤太と幡崎鼎」(『鳴滝紀要』第二九号、二〇一六年)、一一三～一一八頁である。呉秀三は、後に『孤野町史』の編纂主任となった近藤謙蔵という郷土史家から現地の情報を得ていた。伊東は幡崎の江戸蘭学と水戸藩士時代に詳しく、織田は、シーボルトの直弟子でもあった米沢藩医伊東昇迪の日記や関係史料から新たな情報を提示した。様々な事典類にも幡崎鼎の項目が設けられているが、そのほとんどは呉(一九二六)あるいは伊東(一九三七)の情報に基づいている。また、幡崎の生涯を扱った天野華夢『荒海の彼方に 蘭学者 幡崎鼎』(日本文学館、二〇一〇年)という歴史小説もある。

³ 内通詞と内通詞小頭については、横山伊徳「出島下層労働力研究序説―大使用人マツをめぐる―」、同編『オランダ商館長の見た日本―ティツィング往復書翰集―』（吉川弘文館、二〇〇五年）、三七九―四二〇頁、イサベル・田中・ファンダーレン「オランダ通詞稲部市五郎について」、『長崎学』第三号、二〇一九年）、一〇一―一八頁などを参照。

⁴ Johan Frederik van Overmeer Fisscher, *Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk*, Amsterdam: J. Muller & Comp, 1833, pp. 307-308 による。（フィッセル著『日本風俗備考』、庄司三男、沼田次郎訳注〔平凡社、一九七八年〕、第二巻、二二二頁）。

⁵ 長崎歴史文化博物館蔵、一四一七一三一。その前の二八二八年の「分限帳 四」（長崎歴史文化博物館蔵、一四二九六一）に出ている内通詞見習、内通詞見習同格として人数の実数は出る。名前は記されていないが、おそらく藤太と藤平も含まれていたと思われる。

⁶ 石井良助編『天保類集』（御仕置例類集、第一一冊）（名著出版、一九七三年）、二二六、二二〇頁、森永種夫編『犯科帳―長崎奉行判決記録』第八卷（犯科帳刊行会、一九六〇年）、三三頁による。呉（一九二六）も参照。

⁷ 「附言」は「文化十三丙子春二月」のものである。（早稲田大学蔵、ヤ〇四〇一四二七）（<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php?cndbn=%E7%A%A%E7%90%86%E5%A4%96%E7%A7%91%E5%89%87>）（二〇一四年九月検索。以下も同。）第七篇、上巻を参照。長崎滞在中に吉雄六二郎「権之助」の蘭語塾に入門した。（新宮凉庭「西遊日記」、『紀行日本漢詩』〔汲古書院、

一九九二年〕、第三巻、三二七頁を参照）。

⁸ 山本四郎『新宮凉庭傳』、ミネルヴァ書房、一九六八年）四三―四四頁、二〇二―二二二頁、織田（二〇一六）一一三頁を参照。新宮が長崎では吉雄権之助の蘭語塾に入門し、出島商館の出入りも許されていた。特に商館医フェイルケ（J. H. Folke）や商館長ドウフと親しく、フェイルケ所蔵であった Gorter 著の外科書がフェイルケの一八一四年の死後に凉庭に贈られてきた。詳しくは、松田清『洋学の書誌的研究』（臨川書店、一九九八年）第四章「新宮凉庭と商館医フェイルケ」、一〇三―一四一頁を参照。凉庭は一八二六年の江戸参府の途次、シーボルトに京都で会った。呉（一九二六）も参照。

⁹ 藤太の名が出ているフェイルケから凉庭宛ての書簡から推測できる。松田（一九九八）、一一三―一四頁を参照。

¹⁰ 織田毅「史料紹介 伊東昇迪「寄陽日簿」―翻刻及び註解―」（『鳴滝紀要』第二九、二〇一九年）、四九―一〇六頁と同「史料紹介 伊東昇迪「西遊雜記」」（『鳴滝紀要』第三〇、二〇二〇年）、九七―一四四頁による。織田（二〇一六）一一五―一六頁も参照。阿蘭陀人部屋附藤七の住所も今籠町であることから彼らは兄弟だった可能性がある。織田（二〇一六）一一八頁注18を参照。

¹¹ *Stukken betreffende de inkomsten en uitgaven van de opperhoofden in Japan, alsmede enige concept-artikelen tot instructie voor de opperhoofden. 1818* (coll. H. Doeff, collectie 171, invnr. 10; Aanwinsten, 28 oktober 1965, Nationaal Archief (NA), Den Haag, entry nr. 2.21.054). (L.E.G. Schwidder, *Papieren van Hendrik Doeff en enige van zijn verwanten*

(1971) という目録を参照)。

¹² 荷倉役代行 A. Manuel の留守日記の 一八三〇年五月一七日や商館長 G. F. Meijlan 商館長の日記の 一八三〇年七月七日の項による (NA, entry nr. 1.0421, NFJ 245)。

¹³ 織田 (二〇一九) 六七頁と織田 (二〇一六) 一一四頁による。

¹⁴ 藤太の名が天保八 (一八三七) 年九月に今籠町組頭として史料に出る。(森永編『犯科帳』第八巻、一一四頁)。織田 (二〇一六) 一一四と一一八頁 (注 11) も参照。

¹⁵ 長崎県立長崎図書館編『オランダ通詞会所記録 安政二年 萬記帳』、二〇〇一年、一六九頁。織田 (二〇一六)、一一七頁も参照。

¹⁶ 慶応元 (一八六五) 年の「明細分限帳」(長崎歴史文化博物館蔵、三二〇―三二一四) (『慶応元年明細分限帳』長崎歴史文化協会編、一九八五年、一七六頁)。

¹⁷ 例えば、「慶応四年辰年六月改外国管事務所 分限帳」(長崎歴史文化博物館蔵、一四―三二七)。

¹⁸ ライデン 大学 図書館蔵 : Special Collections: Manuscripts, archives and letters, Ser. nr. 63. (<https://digitalcollections.universiteitleiden.nl/view/item/3274514#page/1/mode/1up>)

¹⁹ Henk de Groot, “The great Dutch-Japanese dictionaries in early nineteenth century Japan”, *Voortgang*, 22 (2004), p. 170 による。文字 B も「*blixem*」で終わり、未完のもちである。文字 A に貼ってある Toiokitsi と署名された「*waarschouwing*」(注意書き)(図 3) をみれば、文字 D の 2 が欠けているようである(松田、一九九八年、八六頁)。確かに文字 D の 2 のタイトル頁はなかつ

たが、続いている文字 D の 3 の見出し語は D の 1 の続きであるので、D の 3 は D の 2 である。

²⁰ I. Serrurier, *Bibliothèque Japonaise*, Leiden: E. J. Brill, 1896, p. 20 (nr. 63), H. Kerlen, *Catalogue of Pre-Meiji Japanese Books and Maps in Public Collections in the Netherlands*, Amsterdam: J. C. Gieben, 1996, p. 243 (nr. 554)。この辞典についての情報は後に取り上げるシーボルトの『日本文庫案内』による。ライデン大学図書館のオンライン目録は制作時期を 一八二〇年頃としている。

²¹ 荒木の筆跡はブロムホッフの辞典の文字 A の Toiokitsi と署名された「*waarschouwing*」(図 3)「Letter by ARK Toiokitsi [Araki Toyokichi] to Jcock Blomhoff, Nangasakij, 19 december 1826 (NA, collectie 37, entry nr. 2.21.005.37, J. Cock Blomhoff, invnr. 4) (石山禎一、梶輝行編『シーボルト書簡集成』(八坂書房、二〇一三年)、七七―七九頁、松田 (一九九八)、八六頁も参照)」、Farewell letter by Araki Toyokichi to Von Siebold, 5th day of the 12th month (30 December) 1829 (Ruhr University, Bochum, Acta Sieboldiana, nr. 1.428.000) (石山 梶 (二〇一三))、pp. 77-79)「シーボルト記念館、中山文庫の史料 一三―三六、一三―三一七のオランダ語地理書の写しから判明する。米蔵の筆跡は川原慶賀画の出島図の幡崎鼎 (H. T. Kanaie) による解説文から知られる (Reiss-Engelhorn-Museum, Mannheim, IAs 3363)。

(松方冬子、西澤美穂子、田中葉子、松井洋子編『一九世紀の阿蘭陀商館』下 [東京大学出版会、二〇一二年]、扉頁の写真と長崎市出島史跡整備審議会編『出島図―その景観と変遷―』、

一九八七年、一六八番、一五七、一五八頁を参照)。

²² 例えば、Hの3、Lの1、Pの2がそれに該当する。

²³ De Groot (2004) . p. 170 の指摘による。例えば、初稿の文字Aの「Appelman」の用例「appelverkooper: ringo oer flto」は豊吉が「apper verkoper」と誤写していた。

²⁴ 米蔵はKの2まづは「vito」と書いたが、Pからはすべてを「flto」に改めた。それまづは「vito」あるいは「flto」とし(文字Kの2、Mの2)「flto」としたり(文字Lの1)「vito」とした(Lの2、3)。

²⁵ *ISAGOGE in Bibliothecam Japonicam et Studium Literarum Japonicarum*, Auctore Ph. Fr. De Siebold. Lugdumi-Batavorum apud auctorem, 1841. pp. xxi-xxii.
(https://books.google.co.jp/books/about/Isagoge_in_bibliothecam_Japonicam_et_studium.html?id=dwtUAAAcAAJ&redir_esc=y)

²⁶ 一九七三年にこの辞典を閲覧した鈴木博氏が、当時ライデン大学から京都大学へ留学中であったW. Boot氏に翻訳してもらった和訳による。(鈴木博「ライデンかいまみの記」『滋賀大国文』第一一号、一九七四年、八一頁)。筆者も二〇一七年十一月に同辞典を閲覧し、四〇冊からなっていることが確認できた。「」内は鈴木博氏による注記。

²⁷ Petrus Weiland, *Nederduitsch taalkundig woordenboek*, 11 vols., Dordrecht: Johannes Allart, 1799-1811.

²⁸ 一八八三年珍品陳列室は閉鎖されるが、コレクションの一部はライデン民族学博物館とライデン大学に分納された。

²⁹ オランダ通詞吉雄権之助、茂伝之進、出島乙名吉野七兵衛。

Isagoge (1841) . p. xxi による。

³⁰ ドウフ自身が底本としてハルマの一七二九年の第二版を使ったと、第二稿準備中の一八一六年九月の「諸言」(序文)に記した。

「Inleiding tot het Woordenboek door Hendrik Doeff」早稲田大学所蔵『道訳法児馬』坪井信道(写)、『ホーロー一七四九などを参照。

(https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ho10/ho10_01749/ho10_01749_0001/ho10_01749_0001.html)

ハルマの蘭仏・仏蘭辞典は、François Halma, *Woordenboek der Nederduitsche en Fransche taalen*, Amsterdam: De Wetsteins en Smith: Utrecht: Jacob van Poolsum, 1729 (第11版) : <https://multi.tosyokan.pref.shizuoka.jp/digital-library/detail?ilcod=0000000031-SZK0000968> 第11版 : Leiden: Jacob de Wetstein, Utrecht: Jacob van Poolsum, 1758

(https://books.google.co.jp/books?id=cYTQhInvRQC&prints=ec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false)。

³¹ 古賀十二郎『長崎洋学史』上巻(長崎文献社、一九六六年)、七四〇七五頁によると、古賀が参照した史料の多くが現在確認できない。

³² 改訂責任者(eerste verbeteraars) 中山得十郎と共同翻訳者兼写し手(meede vertaalers en afschrijvers) 吉雄権之助、西義十郎、石橋助十郎、名村八太郎、猪俣伝次右衛門、名村八十郎、西甚三郎、松村作七郎、志筑長三郎、三島松太郎であった(注30の序文)。

³³ Hendrik Doeff, *Herinneringen uit Japan*, Haarlem: Erven

François Bohn, 1833, p. 3. その付録の二六五頁にも “het door mij gemakte en in het net geschrevene Woordenboek” (二六六頁) (私が作成し、清書された辞典) と書かれている。ドゥーフ自身が書いたものを “door mijne eigene hand geschrevene Origineel” (自分自身の手によって書かれた原本) (三頁) とはつきりと区別していた。

³⁴ ドゥーフの後継者宛ての覚書には、ドゥーフが吉雄六二郎 (権之助) と共に作った辞典を「商いのない期間 (*stille tijd*) に目を通して (中略) できるだけ改善するように」勧めた。「これはその (辞) 書の写しを手に入れる良い機会にもなる。」と書いた。

³⁵ 中山作三郎 (得十郎)、吉雄忠次郎、茂土岐次郎、栖林鉄之助、稲部市五郎 (*Isagoge* (1841), p. xxi)。

³⁶ 『和蘭字彙』(一八五五～一八五八)、桂川甫周 (校)、早稲田大学 (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ho10/ho10_00379/)。

³⁷ 注21の書簡を参照。

³⁸ 古賀 (一九六六) 七三～九三頁、鈴木博「ライデンかいまみの記」(『滋賀大國文』第一一号、一九七四年)、七七～八三頁、同「洋学辞書二題」(『滋賀大國文』第一三三号、一九七五年)、四九～五六頁、杉本つとむ『江戸時代 蘭語学の成立とその展開Ⅲ』(早稲田大学出版会、一九七八年)、松田 (一九九八)、七三～一〇一頁。

Henk de Groot, *The Study of the Dutch language in Japan during its Period of National Isolation (ca. 1641-1868)* (diss. University of Canterbury, Christchurch, New Zealand), 2005, Id., (2004), pp. 161-176, Rudolf Effert, “The Dūfu Haruma: An

Explosive Dictionary”, in *Uncharted Waters: Intellectual Life in the Edo Period*, Anna Beerens, Mark Teeuwen eds., Leiden: Brill, 2012, pp. 197-220 がある。

松田清「ドゥーフ・蘭和辞典をつくった商館長」(W・ニヒェル、鳥居裕美子、川寫直人編『九州の蘭学―越境と交流』(思文閣出版、二〇〇九年)、一一六～一二七頁、Christopher Joby “*The Dutch Language in Japan 1600-1900: A Cultural and Sociolinguistic Study of Dutch As a Contact Language in Tokugawa and Meiji Japan*”, Leiden: Brill, 2020 も参照。

³⁹ 松田清「ドゥーフ・ハルマ」初稿の翻刻ならびに『和蘭字彙』ハルマ『蘭仏辞典』との訳語対照Ⅰ、Ⅱ」(『海南手帖』、第二号・第三号、高知大学仏文研究室、一九八四年・一九八六年)、一一九頁、一七～一五頁による。高知の初稿本は完全な形で残っているが、文字GとOだけはまだ見つからない。

⁴⁰ 松田氏は、パリ国立図書館所蔵「江戸ハルマ」(*Edo Halma*) の第一〇冊目 (Bnf. Département des Manuscrits, Japonais 303) に挿入された文字WとXの見出し語のほとんどはドゥーフが和紙にペンとインクで書いたもので、この部分だけは「ゾーフ・ハルマ」の第二稿の一部だと指摘されている (松田 (一九九八)、九〇～九二頁) (<https://archivesmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc1056965>)。

⁴¹ 前田桂子「長崎方言資料としての『ドゥーフ・ハルマ』初稿本―A項目を中心に」(『国語と教育』第四六号 (二〇二二)、四六～三〇(一～一七)頁、Rudy Toet、前田桂子、原田走一郎「『ドゥーフ・ハルマ』の初稿および『和蘭字彙』のFの対象翻刻」(『多文化社会研究』第八号 (二〇二二)、三五～三九七頁、「ドゥーフ・

ハルマ』の初稿および『和蘭字彙』のCの対象翻刻」(『多文化社会研究』第八号「二〇二二」)、二七九～三三五頁を参照。

⁴² 例えば、「Aes」の例文「Zijn wijf houd veel van't Aeschie, (dat is) van brandewijn」を初稿には「anoflo no jomego wa hanahada sijootsiju wo nom」となっているが、豊吉の手で「kano fto no sai wa hanahada brandewijn wo soeite or」と変わった。

第三稿と『和蘭字彙』には「彼の妻ハ甚焼酎を好んでおる」と「彼ノ妻ハ甚々焼酎ヲ好デ居る」と記されている。

⁴³ 豊吉についての先行研究に関しては、沼田次郎「荒木豊吉という阿蘭陀通詞について」(『長崎市立博物館館報』第三一号「一九九〇」)、一～九頁を参照。

⁴⁴ 注16『慶応元年明細分限帳』、一六七頁(荒木八之進の項)にもよる。

⁴⁵ 一八二六年の商館長の留守日記(NA, NFI 239)による。

⁴⁶ 一八一〇年の商館長の留守日記(NA, NFI 223)による。

⁴⁷ 注5の「長崎諸役人帳」による。

⁴⁸ 「荒木豊吉事蜂之進」という記述は「鷹見泉石日記」の一八三七年四月一日に出る(古河歴史博物館編『鷹見泉石日記』第三卷「吉川弘文館、二〇〇二年」二二二頁、片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』(吉川弘文館、一九八五年)二四〇頁も参照)。泉石は豊吉と菊谷藤太兩人と面識があったようである(片桐「一九八五」、二四二頁)。
⁴⁹ 注16と同様。他の分限帳類には一八六三年以降は「大通詞」となっている。

⁵⁰ C. R. Boxer, *Jan Compagnie in Japan, 1600-1850*, The Hague, Martinus Nijhoff, 1950 (second revised edition), plate XI, p.

108. この肖像画は元々Boxerが所蔵していたが、現在行方不明である。肖像画の上部に「*Hollander en slaaf*」(オランダ人と奴隷「身分」の召使い)と記されていたとBoxerは記している。

⁵¹ 勝盛典子『近世異国趣味美術の史的研究』(臨川書店、二〇一一年)、二九一～三〇九頁などを参照。

⁵² 松井洋子「シーボルトの勘定帳…出島における経済活動を探る」(『シーボルトが紹介したかった日本』、国立歴史民俗博物館編、二〇一五年)、一四七～一五六頁を参照。

⁵³ 森永編『犯科帳』、第八卷、三二頁による。

⁵⁴ 森永編『犯科帳』、第八卷、三三頁による。

⁵⁵ G. F. Meijlan 商館長日記、一八二九年三月三十一日(NA, NFI 244)による。

⁵⁶ 高良斎からシーボルト宛ての書簡(石山、梶「二〇二二」、八三頁)による。

⁵⁷ 呉「一九二六」、乙篇一一〇頁による。

⁵⁸ 森永編『犯科帳』、第八卷、五七頁による。

⁵⁹ 『御仕置例類集』一一、二一〇～二二一、二二六～二二七頁、「附蘭人シーボルト再渡許容顛末と申渡類」(呉「一九二六」、乙篇、一〇四～一〇五、一〇九～一一〇頁と二二七～二三五頁)を参照。「蘭人シーボルト再渡許容顛末」では、米蔵の名は「藤吉」として出る。(オンライン公開「顧問／蘭人シーボルト微雇一件附録」(アジア歴史資料センター)(統通信全覧類輯之部備雇門七七七)(外務省外交史料館)(<https://www.jacar.archives.go.jp/das/image/B13090502800>)(雄松堂出版の復刻版もある)；

『続通信全覧』類輯之部二四、第四〇卷、一九八六年、一〇〇（一三五頁）。

⁶⁹ SABB B 17 Fa-A 67.